

## 『延慶本平家物語』における葵前・小督・小宰相物語への一考察

四重田 陽 美

はじめに

王朝時代の崩壊、王法の乱れる中、隆盛を誇った平家一門が、一族の長たる平清盛を喪つて滅亡への道を辿る有様を描いた『平家物語』は、後代に著わされた『太平記』と並んで軍記物語の代表格としての名を恣にしている。その戦いの物語にあつて、女性たちは、運命に翻弄される悲しさを現す存在として描かれると同時に、殺伐とした戦いの物語に、王朝的情趣を添える効果をもたらした。物語に点在する女性たちは、一見、出自も、背負う運命もそれぞれ異なる別個の存在のようである。これらの女性たちの説話は、その場の小道具的存在であつて、物語全体の構想に大きくは関わらないものなのだろうか。

『平家物語』において、読み本系と呼ばれる『延慶本平家物語』

(以下、延慶本と表記)が、語り本系の諸本より熱心に、物語に登場する人物の説話を取材し、数多く取り込んでいることは周知のとおりである。そして、延慶本においては、物語に登場するある人物を描写する際に、それらの説話を巧妙に配置して、その人物と対峙するもう一人の人物を設定し、両者を対比させることによつて、その人物像を強調していく技法が見られることについて、拙論<sup>①</sup>を展開してきた。

延慶本は、記載されたそれらの説話の取り込み方と種々多様さのせいで、物語の登場人物やその置かれていた状況に関する説話を、物語の構想に関係なく記載しているように思われがちだが、この人物対比の技法に注目すると、これらの説話にも、作者の、物語全体の構想を意識した視線が行き渡っていることに気づく。点在する女性たちの説話にもまたこのような視点を読み取ることはできないだ

ろうか。そこで、本稿では、延慶本における小宰相物語の前半、つまり、平通盛との出会いに関する話に注目し、他の女性たちの説話との関わりについて、考察を加えてみたいと思う。

『建礼門院右京大夫集』には次のような記述がある。

治承などの頃なりしにや、豊の明りの頃、上西門院女房、物見に車二つばかりにてまゐられたりし。とりどりに見えし中に、小宰相殿といひし人の、びんひたひのかかりまでことに目とまじしを、としごろ心かけていひける人の、通盛の朝臣にとられてなげくと聞きし。げに思ふもことわりとおぼえしかば、その人のもとへ、

さこそげに君なげくらめ心そめし山のもみちを人に折られ  
て

かへし、

なにかげに人の折りけるもみち葉をこころうつして思ひそ  
めむ

など申ししをりは、ただあだごとこそ思ひしを、それゆゑ底の藻屑とまでなりしを、あはれのためしなさは、よそにてなげきし人に折られなましかば、さはあらざらまし。かへすがへすためしなかりける契りの深さはいはむかたなし。

建礼門院平徳子のそば近く仕え、平家一門と関わりを持った作者右

『延慶本平家物語』における葵前・小督・小宰相物語への一考察

京大夫が、よそながらも「ことに目とまりし」ほど美しいと思つて見た小宰相の計報に接し、「あはれのためしなさ」と評したのは、通盛と小宰相の「ためしなかりける契りの深さ」だった。その人と出会わなければ、命まで失うことはなかったかも知れない。その人に愛されなければ、恐ろしい目に遭わずに済んだかも知れない。しかし、それは、前世からの宿縁であり、二人が出会い愛し合うことは、「ためしなかりける契りの深さ」のゆえだったのだという。

延慶本は、この「契りの深さ」を意識して、通盛と小宰相の出会いを語っているが、それは後述することにして、小宰相以外の女性に関して、『平家物語』に見られる「契りの深さ」を探ってみたと思う。

## 第一章 葵前

『平家物語』巻六、延慶本では巻第三本の、高倉上皇の崩御の記事の後に、高倉上皇が統治者としての規範を正す、深慮ある人物であることを示すエピソードとして描かれるのが、葵前という女童との関わりである。この葵前の章段については、延慶本で、主人公が「青井」、四部合戦状態で「青生寝野」と記載されること、関白基房が、女童を養女にした上で出仕させようかと相談するが、延慶本・長門本等で関白忠通、四部本で後徳大寺実定となっていることなど、

細かい点での相違はあっても、全体的な話の流れでは語り本系と読み本系の記載に大きな相違はない。

その物語の流れは、以下の通りである。中宮のそばに仕える女房の使っていた女童の葵前を、高倉天皇が深く愛したが、噂が流れるや、天皇は葵前をそば近くに召すことをやめた。関白が同情し、身分違いが障害となるなら、葵前を自分の養女にしようと申し出たが、天皇は世の批判を憚って断念した。その後、天皇の書きすざびの古歌を人伝てに賜った葵前は、宮廷を退出し、まもなく亡くなった。

この説話は高倉上皇の崩御を記した直後に語られ、高倉天皇が、葵前を愛しながらも、統治者として後代のそしりを憚り、その愛を断念する賢帝であったことを示し、王法の乱れた時代の中で、高倉天皇がいかに優れた統治者であったかを示すと同時に、その優秀さに、長くは地上にとどまるはずのない存在であったことを暗示する役割を持っている。

さらに、この「葵前」は、この直後の「小督」の章段に対して、前置きの存在として評価される章段である。確かに、覚一本では、葵前を喪った高倉天皇が、「恋慕の御おもひにしづませおはします」ので、これを「申しまぐさめまいらせんとて、中宮の御方より小督殿と申す女房をまいらせらる」とある。このため、「葵前」の章から「小督」の章への移行が自然で、一度は統治者としての立場を考

慮して自らの気持ちを抑えた高倉天皇が、清盛の専横には断固とした態度を取るといふ、高倉天皇の意志の変容も明確に描かれる。

しかし、延慶本では、高倉上皇の崩御を記した後、青井という女童部との悲恋と、小督との悲恋との間に、作者は関連性を持たせるような叙述を行っていない。むしろ、この二つの説話の間に、高倉天皇の母建春門院の死をとりあげ、母を喪った悲しみを表に出さず、「サラヌ牀ニモテナサセ御ナガラ、御歎ニタヘサセ給ワヌ御気色」を見せる高倉天皇の、統治者として常に理性的で民を深く思う姿を描いている。

では、この青井の説話は、延慶本においては、どのような役割を担っているのだろうか。小督の説話の前置きの存在としてではなく、一個の説話としてみると、今まで『源氏物語』の影響について多くの指摘を受けてきた小督の説話以上に、この青井の説話が『源氏物語』桐壺巻の影響を強く受け、高倉天皇のつた行動が、桐壺帝とはまったく対照的に描かれていることに気づく。

まず、覚一本ではあきらかにされないが、延慶本では、高倉天皇が青井と出会ったのは、「建礼門院入内之比」である。つまり、中宮平徳子は、入内の初めから、天皇と親密な関係にはなれなかったようだ。父清盛が不安に思うのも無理はない。そこで後述の、清盛が青井の死を知って、ようやく高倉天皇が娘に近づいてくれるかも

知れないと、喜ぶ場面が現実味を増す。

さて、この青井の出自だが、『源氏物語』の桐壺帝が愛したのは、身分の非常に高い女性ではなかったが、あくまでも大納言の娘であり、更衣として入内した女性であった。しかし、青井は、中宮付きの女房が使う女童という非常に低い身分の女性である。そして、この身分の低い女性と天皇との深い愛は、二人の仲が噂になるやいや、一方的に天皇が断つ形で終わりを告げる。桐壺帝が周囲の顰蹙を憚ることなく桐壺更衣を深く愛し続けることは、対照的である。そして、桐壺更衣が、周囲の壮絶ないじめの中、天皇の愛に応えるためにのみ強く生きて、主人公の源氏の君をもうけるのに対し、青井は、短い間ではあったが、天皇の真実の愛を受けたことを胸にはかなく亡くなってしまふ。

天皇が書きすさびの形で青井に送ったメッセージの和歌は、しのぶれど色に出でにけり吾が恋は物や思ふと人の問ふまでという古歌であった。これは、天曆の歌合で、平兼盛が詠んだ和歌である。この時の題は「初恋」であった。天皇は、青井という女童相手に、隠しても隠しきれない物思いを人に見とがめられるほどの初恋をしたと告げたのである。青井は、この高倉天皇の書きすさびを手に入れ、懐に入れて、「心地例ナラズ」と宮中を退出する。そして、覚一本の五、六日とは異なり、「煩事わづらふこと卅余日アツテ、此これヲ

『延慶本平家物語』における葵前・小督・小宰相物語への一考察

胸ノ上ニアテテ、終ニハカナク成ニケリ」という結末を迎える。この時の「此こ」とは、高倉天皇の古歌の書きすさびである。青井は、天皇の抑えがたい恋情が自分に向けられているものであることに感動し、胸を痛ませ、天皇の気持ちを胸に染みこませて一生を終えた。覚一本においては、この葵前の死を『白氏文集』巻四「井底引銀瓶」からの引用で「君が一日の恩のために、妾が百年の身をあやまつ」ともかやうの事をや申すべき」と評し、葵前は高倉天皇に「ごく短い時間寵愛を受けた恩のために、一生を捧げたとしている。しかし延慶本では、青井の死については「イト哀ナリシ事ナリ」と述べるにとどまる。そして、清盛が青井の死を知って限りなく喜び、「サテハ今ハ中宮ノ御方ニ近付せ給ラム」と期待するが、青井の退出で落胆する高倉天皇が中宮に近づく様子もないことにつかりしと記したあと、次のような形で同じ白楽天の漢詩を掲載する。

主上是ヲ聞食テ、御涙ニ咽ビヲハシマス。「為君一日恩、誤妾百年身、寄言癡少人家女、慎勿将身軽許人（君が一日の恩のために、妾が百年の身を誤つとも、言を癡少なる人家の女に寄せて、慎みて身をもって軽がろしく人を許すことなかれ）（書き下し文は筆者による）」トコソ禁メタレトテ、恋慕ノ御思毛猿事ニテ、代ノ誘ヲゾ猶深歎思召ケル

（『延慶本平家物語』第三本 四 青井ト云女内へ被召事）

高倉天皇が一時の激情にかられることなく、恋慕の思いを持ちながらも世の批判をばばかつて、青井への恋慕の思いを断念したことを誉め称え、この後には、さらにその統治者としての優秀さは、唐の太宗と比べても、「猶増まレル御心バセナリ」と締めくくる。

これらの比較を通しての考察によれば、延慶本における青井の説話の役割は、あくまでも、その直前の章で述べた高倉上皇の崩御の記事を受け、高倉上皇がいかに統治者として優れていたかを強調するものである。高倉天皇の愛情を受けた青井の死によって、高倉天皇の愛情の深さは比類なきものとなり、その例のないほど深い愛情をも、民のために、世の批判をばばかつて断念する高倉天皇の、統治者としての素晴らしさが明確となる。王政がゆるぎなかった『源氏物語』の世界でさえ、統治者桐壺帝がおのれを律することのできなかった「契りの深さ」を、民のために抑えたのが高倉天皇だと、延慶本は「青井ト云女内へ被召事」で、描こうとしたのではないだろうか。

では、その青井の説話の次に位置する小督の説話は、どのような役割を担っているのだろうか。そこで、第二章では、小督の章段を読み深めることとした。

## 第二章 小督

小督の説話は、平家物語の中でもかなりの頁を占める。物語自体も、小督の紹介、貴族冷泉大納言隆房卿との恋、天皇の寵愛、平清盛の憎しみといった、宮中内部での出来事にはじまり、清盛の怒りを恐れた小督が嵯峨へ逃れたため、舞台は嵯峨へ移る。藏人仲国の嵯峨探索、琴の音に導かれて小督発見、清盛の意志に背き小督を連れ戻そうとする天皇、舞台は再び宮中へ戻って、小督の妊娠・出産、そして、覚一本には詳細はないが、延慶本では、清盛が御所に踏み込んでくる。

清涼殿ニ渡セ給ト聞テ、大床アララカニフムテ参ル。入道ト御覧ジケレバ、主上いそ忿ギ入セ給ヌ。小督殿ハ立去方モ無シテ、キヌ引カツギテフサレタリ。入道枕ニ立テ、「汝ハ世ニモ不憚はぢか、入道ニモ不恐おそれシテ、中宮ノ御心ヲ奉なやましてま惱こコソ不思議ナレ」トテ引出シツツ、自ラカミラシ切テゾステケル。小督局心ナラズニナサレテ、口惜トモ云ま計ナシ。

（『延慶本平家物語』第三本 五 小督局内裏へ被召事）  
天皇の御所に許されもなくずかかずかと上がり込み、逃げられない小督を捉え、引きずり出し、小督を尼にするため「自ラ髪押シ切テ」捨てたる清盛の姿は、もはや人間とは思われない。おそらくは、目撃

者や巷間に伝わる説話によって様々に増補されたであろう小督物語は、高倉天皇の崩御、青井の物語の後に置かれ、平清盛の専横を強調すると同時に、高倉天皇の死因の一つとして、小督という愛する女を守りきれなかった後悔と天皇として清盛の振舞を止めることのできなかった高倉天皇のやり場のない口惜しさを示す役割を担っているであろう。

覚一本では、「か様の事共に御悩はつかせ給ひて、遂に御かくれありけるとぞきこえし」とあるのみだが、この「小督局内裏へ被召事」では、清盛に強引に尼にされるといふ辱めを受けて死を望んだ小督が、思い返して大原で仏道修行の日々を送ったと書いた後に、高倉天皇の怒りが次のような形で描かれている。

主上、「吾万乗ノ主ト云ナガラ、是程ノ事、叡慮ニ任セヌ事コソ口惜ケレ。丸ガ代ニ始テ、王法ノ尽ヌル事コソ悲シケレ」ト、御歎有シヨリシテ、イトド中宮ノ御方ヘモ行幸モナラズ、深く思召沈マセ給ケルガ、御病トナリ、終ニハカナク成セ給ニケリトゾ承リシ。

(同右)

つまり、延慶本では、高倉天皇は単に怒りや小督を失った悲しみで落胆して亡くなったのではない。本稿第一章で考察したように、直前の章段の、「青井」の説話で、高倉天皇を王法の乱れた平安末期にあって、統治者としての法を貫き通そうとした賢帝として描き、

『延慶本平家物語』における葵前・小督・小宰相物語への一考察

その高倉天皇が、「丸ガ代ニ始テ、王法ノ尽ヌル事」を目の当たりにした悲しさに、生きる力を失ったと、延慶本には書かれているのである。この小督の章の最後で、延慶本は、興福寺別当権僧正教縁の亡くなったことを記した後に、「誠ニ心有人ノ、堪テナガラウベキ世トモミヘズ」と叙述している。統治者としての理想を貫く高倉天皇が、この世に生きながらえるはずのない人であったことを、延慶本は小督の説話を通して示したのである。

ところで、小督の説話には、この、高倉天皇の寵愛を受ける以前に、貴人冷泉大納言隆房との関わりが描かれている。小督を見初めた隆房は、熱心に求愛し、一度は小督を手に入れるが、天皇の召しによって、二人の関係は終止符を打たれる。そのような深い愛情を振り切つて天皇の寵愛を受けた小督だからこそ、天皇の深い愛情を得られたのだという、天皇と小督の絆の強さを示す話ともとれるであろうが、『平家物語』後半にも、同じく出会いから運命的な結末まで、詳細な叙述で紹介されている女性がいる。それは、平通盛の妻、小宰相である。確かに、『延慶本平家物語』においては、登場人物たちの置かれる状況が近似する場合に、同じような表現を重複して用いることによって、その場面を浮き立たせるという手法が随所に見られる。しかし、小督と小宰相の二人に共通した部分が多く見られ、そこに、対照的な描写があるとすれば、小督と小宰相の共

通点と相違点に作者が描き出そうとしたものが見えるのではないか。小督と隆房の物語を、小宰相と通盛の物語と比較した場合に、そこに作者のなんらかの視点を見いだせるのではないだろうか。そこで、次章では、小督と隆房、小宰相と通盛の出会いを比較検討したい。

### 第三章 小督と小宰相

まず、小督自身については次のように書かれている。

其比、又内侍督ノ方ニ奉公シテ、小川ノ殿トテ、品イシカラヌ  
女房ノ齡廿ノ数ニ不入ガ、容顔美麗ニシテ、色兒人ニ勝レ、心  
ノ色モ情モ深カリケリ。サレバ見人思ヲ懸、聞人、心ヲ悩サズ  
ト云事ナシ。(同右)

先述の青井が、非常に身分が低かったのに対し、小督は「品イシカラヌ女房」であった。その上、青井については、容貌に関する叙述がないが、小督は、「容顔美麗ニシテ、色兒人ニ勝レ、心ノ色モ情モ深カリケリ」と書かれている。小宰相も上西門院に仕える女房であった。延慶本では、小宰相自身について次のように書かれる。

頭刑部御憲方ノ御娘、上西門院ノ御所ニ小宰相殿ノ局トテオワシケリ。兒形人ニ勝レテ心ニ情深、天下第一ノ美人ノ聞オワシケレバ、見人聞人、哀ト思フヌハナカリケリ。(同右)

延慶本によれば、通盛が見初めた時、小宰相は十四歳、その後三年

の月日を経て通盛の妻となったのは、十七歳、そして平家と共に都を離れ、通盛戦死の計報を聞いて西海に沈んだのは、十九歳だった。小督と小宰相は共に、二十歳に達しない、宮中に仕える女房で、顔立ちは人にすぐれ、心は情け深く、見る人聞く人が心奪われる女性であった。

次に、小督と隆房の出会いには、次のような叙述である。

彼女房ヲ見テシヨリ、心ヲ移シ給テ、艶書ヲ遣シケレドモ、  
取モ入給ワズ。サルマ、ニハイト、心モアクガレテ、万ノ仏神  
ニ祈、明テモ暮テモ、臥沈ミモダヘコガレ給ケル程ニ、多ノ年  
月ヲ送り、数ノ歌ヲヨミ、尽シナドシケレバ、情ニヨル習ニテ、  
終ニハナビキニケリトゾ聞ヘシ。志深シテ、ウレシナド云モ中  
々愚也。(傍点筆者) (同右)

多くの年月、和歌を送り続けた結果、「情ニヨル習」で小督は隆房の愛を受け入れる。隆房が、うれしいなどという表現では言い表しきれないほどの喜びと共に、小督を深く愛した。ところが、小督は天皇に召されてしまう。隆房は悲嘆に暮れ、思いあまつて、「外ナガラ奉見事モヤアル。詞ノスヘニモヤカル」と用もないのに参内するが、小督からは一切反応がない。隆房は「弥悲クテ、生タル心地モセ」ず、一首の和歌を詠んで小督のいる御簾の内へ投げ入れる。

小督局、「吾内裏ニ被召テ参ナム後、争御後グラク、カ、ラム  
フシヲ見ルベキ」ト、心ゾヨク思ナシテ、忿取、ツボノ内ヘゾ  
投出シ給ケル。隆房ハウラメシク心ウクテ、人モヤミルトツ、  
マシケレバ、忿ギ取、カクコソ思ツヅケ、レ。

玉ヅサライマハ手ニダニトラジトヤサコソ心ニ思スツトモ  
加様ニ口スサビテ、泣々罷出ニケリ。「今生ニハ会見ム事モカ  
タケレバ、今ハ生テモ何カセム。仏神三宝、願ハ命ヲ召テ、後  
生ヲ助ケサセ給ヘ」トゾ、明テモ晩テモ被祈ケル。(同右)

さて、小宰相と通盛の出会いほどのようなものであったか。通盛  
が小宰相を初めて見る時の描写は、覚一本には次のようにわずかし  
か書かれていない。

女院法勝寺へ花見の御幸ありしに、通盛の卿、其の時ははまだ  
中宮の亮にて供奉せられたりけるが、この女房をただ一目見て、  
あはれと思ひそめけるより、そのおもかげのみ身にひしとたち  
そひて、忘るるひまもなかりければ、はじめは歌をよみ文をつ  
くし給へども、玉章たまむねの数のみ積もりて、取り入れ給ふ事もなし。

(日本古典文学大系『平家物語』巻第九 小宰相身投)  
しかし、延慶本では、花見の様子が七五調の美文で紹介され、他の  
女房たちが牛車から下りて花見を楽しむのに、一人、車内に残って  
いた小宰相を上西門院が呼び出すのを通盛が見たと描かれている。

『延慶本平家物語』における葵前・小督・小宰相物語への一考察

通盛此ヲ一目ミ給シヨリ、人シレズ病ト成ニケリ。色ニ出テタ  
ヘズ人ニ問ケレバ、年来優ニ聞給シ小宰相殿是也。今一シホゾ  
増リケリ。日々ニ副テハ重ク成リ給テ、臥沈テオワシケリ。  
「神モユルス御事ナラバ、ミタラシ河ニフミモ沈マバヤ」トノ  
ミ思ワレケレドモ、ソレモ叶ワヌ御事ナレバ、タッアケケレハ  
此人ノ事ヨリ外ハ他事ナクゾ思ワレケル。

〔延慶本平家物語〕第五本 卅 通盛北方ニ合初ル事付同北方  
ノ身投給事)

六条の局という乳母の手助けで、ようやく手紙を小宰相に渡すこと  
ができる。

カクト知ラセ始給テ後ハ、三年マデ、玉章たまむね数ノミツモリケレド  
モ取モ入給ハズ。サレドモ三位是ニナグサミテ、露命消ヤリ給  
ハズ。(傍点筆者) (同右)

三年経つて通盛は小宰相がなびかない事を嘆き、「明日ハ戒ノ師請  
ジテ出家シ、高野粉河ニモ入コモリ給ワム」と決心するが、「御内  
ヘマヒラセ給ワム時、コマカニ御文ヲアソバシテ、車ノ内ヘナゲ入  
給ヘ」との助言に従い、車中に投げ込まれた手紙を誤って落とした  
小宰相は、それを読んだ上西門院が返歌をし、「御秘蔵ノ御車、御  
牛カケテ、小宰相殿ヲ三位ノ許ヘ被送ニケリ」という形で、通盛と  
結ばれることになった。



隆房と通盛は、共に美人で名高い女房を見初め、恋の病に「臥沈」み、共に手紙を送り続けた。そしてある時は、恋文を受け取って欲しい一心で、御簾や牛車の中に手紙を投げ込んだ。二人の違いは、小督が天皇の寵愛を受け、御簾の中に投げ込まれた手紙を、「心ツヨク思ナシテ、忿取、ツボノ内ヘゾ投出シ」て、隆房を遠ざけたのに対し、小宰相は車中に投げ込まれた手紙を取り、上西門院の「アマリ二人ノ心ツヨキモ身ノトガトナル」という諭しを受けて、通盛と結ばれたことである。この両者の対照的な結果を、延慶本は、共通する語句や表現を多く用いながら示し、通盛と小宰相、さらには、「心ツヨク」隆房を拒み高倉天皇との「御志の深さ」を受け入れた小督と天皇との「契りの深さ」を強調していると言えるのではないだろうか。

### おわりに

以上の考察より、『延慶本平家物語』においては、葵前の説話は高倉天皇が統治者として乱れた世の中にそぐわないほど優秀である姿を、小督の説話では、その優秀な高倉天皇が平清盛の専横に耐えられず命を縮めていく姿を描き、さらには、巻第三本と巻第五本というかなり離れた巻においても、小督と小宰相という二人の女性に、共通する表現を多用しながら、高倉天皇と小督、通盛と小宰相の、

「志」と「契り」の深さを叙述していると考えられる。小宰相については、平家の都落ちの際、通盛と共に都を離れる道を選んだことについて、

カクテナレソメ給テ年来ニモナリニケレバ、互ニ御志浅カラズ  
被思タリケレバ、父母シタシキ人々ニモ離レテ、是マデオワシ  
タリケルニヤ。 (同右)

としながらも、小宰相が通盛と同じ舟に乗っていないことを、次のように説明している。

漢武帝上林苑ニ御幸アリ。慎夫人ト云ヘル女御、傍ニラワス。  
薜蘿ヨツテ夫人ノ座ヲシリゾケケリ。公ノ御気色カワリ夫人イ  
カレル色アリ。薜蘿ガ云ク、「公ハ后ヲハシマス。夫人妾ナリ。  
妾ハ君ト床ヲ一ニスル事ナシ。昔ノ人薨ガタメシヲ思知給ヘ」

ト云ケレバ、夫人此事ヲ覺リ得給テ還テ喜。薜蘿ガ賢キ心ヲ悦  
給テ金三十斤ヲ給ケルトカヤ。越前三位此事ヲ思給タルニヤ、  
小宰相殿ハ妾ニテオワシケレバ、一舟ニハ住給ワズ、別ノ御船  
ニオキ奉テ時々通給テ、三年ガ間波ノ上ニ浮ビ給ケルコソ哀ナ  
レ。 (同右)

小宰相の説話を、平家物語に取り込む際に、延慶本が、巻は離れていても、葵前と小督の説話と、この小宰相の説話との間に、物語に一貫する視線を持っていたとすれば、ここには、どれほど深く愛し

ていても、青井を側近く迎えようとしなかった高倉天皇を、「為君  
一日恩、誤妾百年身、寄言癡少人家女、慎勿将身軽許人」トコソ  
禁<sup>いま</sup>メタレトテ、恋慕ノ御思モ猿事ニテ、代ノ誘<sup>そしり</sup>ヲゾ猶深歎思召ケ  
ル」と叙述した作者が、青井や小督を愛した高倉天皇の志の深さと、  
範を崩さない態度を、小宰相を愛した通盛がまた同じように持ち合  
わせているとして、両者を重ねるような視線を持っていることがこ  
こに読みとれるだろう。

#### 注

- ① 拙稿「延慶本平家物語」における対比・対照法の構成と読み（『軍  
記物語の窓』第一集 平成九年二月一〇日 和泉書院）等で検討。
  - ② 古くは、後藤丹治「平家物語出典の研究（二）」（『国語と国文学』昭  
四・三）に見られ、渥美かをる「平家物語の基礎的研究」（三省堂・昭  
三七）にもそれらの考察が見られる。
- なお、本文の引用は、『平家物語（覚一本）』は日本古典文学大系（『岩波書  
店』）、『延慶本平家物語』（勉誠社）、『建礼門院右京大夫集』は細川文庫  
本（新潮日本古典集成）による。